



新在家南の旧鶴沼川跡の河原

(薄皮まんじゅうのように礫層の上に薄い表土がかむる)

時代は遙かに下るが、蒲生来封の元和末年（九年―一六二三）からの旧鶴沼川跡の新田開拓には、計画的な開拓と、屋敷割りなど行なった跡が、新鶴村の新屋敷新田や、十二所新田などにみられる。宿場割りとしては下荒井などにその跡がうかがわれる。

大正初期からの耕地整理事業の北会津村地域には、いつてきたのは、寺堀などには一・二間に二・五間の旧式の一反割りもみられるから、明治中期の形式で、真渡は大正九年から、出尻は大正十年頃、宮の下・石原・中里などは何れも大正九、十年頃より二、三年間で、逐次行なっていった。これには宮の下から新屋敷新田を通り新屋敷に至る、所謂柳津街道の大改修を大正九、十年に施行しているの、それにともなったような形のもあった。やはり、扇状地末端の、北会津村としては、早く開拓された北半が、耕地整理も早く行なわれているのは、それだけ整地にも逐次手が増えられてきた証拠であるかも知れない。西麻生の向川原地区は遙かに

おかれて昭和三十三年に、西後庵では河川改修、道路のつけかえを兼ねて昭和三十八、九年に行なっている。

石原と中里の間に耕地整理の記念碑が建っているが、大正十年二月起工、十二年八月竣工とある。中里分で民有地三〇八反二一一步が三三四反五二七歩、国有地二四反六二八歩が三三反三〇一步になったとあるから、増歩地は三町三反九畝一八歩となる。同じく石原分では民有地三〇六反〇〇五歩が、整理後は三三七反四二二歩、国